

俊頼髓脳

沓冠折句の歌

沓冠折句という詠み方の歌というものがある。十文字分ある事物の名前を五句の一番上と一番下に置いて詠んだものである。

「合わせ薫き物が少しほしい」という頼み事を各句の上下に置いて詠んだ歌、

逢坂の関も、夜更けになると往来を取り締まる関守もいない。夜更けに私の元に来なければ来なさい。もし来たならば帰さないで愛しますよ。

これは、仁和の帝が後宮の方々に差し遣わされたものであるが、皆はその沓冠歌の意味が理解できず、取りあえず、返歌をし申し上げなされたのだが、広幡の御息所と申し上げた方は、返歌はせずに、合わせ薫き物を差し上げなされたので、帝は広幡御息所を和歌の心得の深い人よと感心されたと今に語り伝えられている。

「女郎花」「花薄」ということを、五文字をそれぞれの句の上下に据えて詠んだ歌の例。

小野の萩はかつて見た秋の様子には似ず、たくさん花もつけている。長い年月訪れなかったのは過ちであった。こんなに様子は変わったのだから。

これは、しもの「はなすすき」を第五句末から逆さまに読むべきものである。これも一つの詠まれ方である。